

## GCOE 国際会議出席報告書（外国旅費用）T1203

拠点リーダー 川合 光 殿

(ふりがな) 氏 名	うえだ よしひろ	所属・学年/職名	指導教員名 (院生の場合)
	上田 佳宏	宇宙・准教授	
Tel,Fax e-mail	753-3902 (Tel), 753-3897(Fax), ueda@kusastro.kyoto-u.ac.jp		
発表題名	Cosmological Evolution of Active Galactic Nuclei		
著者名	Yoshihiro Ueda		
会議名称 ・開催期間	Half a Century of X-ray Astronomy 自 2012 年 9 月 17 日 ～ 至 2012 年 9 月 21 日		
開催地 (国、市)	ギリシア、ミコノス島		
出張期間	自 2012 年 9 月 14 日 ～ 至 2012 年 9 月 24 日		
国別および 総参加者数	アメリカ 50、イタリア 30、イギリス 30、ギリシア 20、フランス 20、スペイン 10、ドイツ 10、日本 10 ほか、総参加者数 約 200		
<p>発表内容、聴衆の反応、質疑応答、その他について簡潔に記述してください。 (口頭発表・ポスター発表の別も文中に明記すること。)</p> <p>「活動銀河核の宇宙論的進化」というタイトルで 40 分間の review talk (総合講演) を行った。本講演ではまず、これまでの X 線サーベイの歴史、X 線を用いて活動銀河核を探索する意義、X 線背景放射の起源についての簡単なレビューを行った。その後、発表者らが過去に中心に行ってきた研究の成果を中心に、X 線によって発見された活動銀河核の光度関数の宇宙論的進化、ガスや塵によって隠された活動銀河核の割合が赤方偏移とともにどう変化するかという基本的な観測量についての報告結果をまとめ、さらにその理論的解釈について簡単に紹介した。さらに、活動銀河核の中心にある巨大ブラックホールの質量分布関数についての最新成果を発表した。最後に、いま活動銀河核の分野で大きな話題となっている、非常に大きな吸収をうけた「コンプトン厚」活動銀河核の存在量について、過去の結果の総括を行った上で、それに対する自分自身の見解をまとめた。これに関連して、2014 年度打ち上げ予定の ASTRO-H 衛星による研究進展の展望について述べた。</p> <p>聴衆は X 線天文学者が大多数を占めていたものの、活動銀河核を専門の研究対象としない研究者が過半数だったため、基本的な事項を平易に解説するように努めた。その甲斐あって、レビュー内容は聴衆に非常によく伝わったようで、公式な質問時間 (5 分間) 以外にも、会場で多くの参加者から好意的な反応をいただくことができた。講演後の質問応答では、活動銀河核を「隠して」いるトーラスとよばれる構造体の物理状態についてのコメント、可視および X 線で見た活動銀河核タイプの相違についての議論、また 300 キロ電子ボルト以上の宇宙ガンマ線背景放射の起源についての質問があり、まだ多くの未解決課題が残っている事実が再認識できた。講演以外には、活動銀河核サーベイに関するセッションの座長を務めるなど、会議の成功に大きく貢献し、日本人として存在感を示すことができたと考えている。</p>			